

イリノイ大学派遣留学月例報告書



先日、梅の仲間のような花が咲いているのを見つけました。無色彩だった冬のイリノイに、春を思わせる赤い色が鮮烈です。気温も3月末日のある日を境に突然春らしくなり、半袖で出歩く人の姿も見られるようになりました。といっても、こちらの国では稀にはありますが、年中半袖で出歩く人を見ることができてしまうのですが。とにかく、気温も暖かくなり、過ごしやすい日が続いております。

さて、授業についての感想は来月にまとめることにして、今月は演劇についてまとめます。

<内容>

1. はじめに **アメリカ演劇の実際に触れて**
2. 文化としての演劇
3. 教育の中に生きる演劇
4. 習熟した観劇マナー
5. すばらしい劇場
6. 日米俳優比較
7. やや幼稚なミュージカル
8. まとめ

2. はじめに **アメリカ演劇の実際に触れて**

私は、学部生のときに金沢市民芸術村を中心に演出として演劇に関わってきました。そして、私の元恩師の演出家の先生に、アメリカの演劇事情について聞かされる機会が幾度もありました。そしてその話を聞く度に、アメリカを含む西欧の演劇に強い憧れを抱くようになり、いつかアメリカや西欧を訪ねて、それら演劇に触れてみたいと思うようになりました。そして今、実際にアメリカに滞在しながら演劇を観、学ぶ機会を得ているわけです。しかし、実際に触れてみれば、憧れていただけの時には見えてこなかった、アメリカ演劇に対する疑問や新しく面白いと感じた点などが多々ありました。今回はこれらのことをまとめたいと思います。

3. 文化としての演劇

こちらへ来てすばらしいと感じたことの一つは、演劇を含む芸術に足を運ぶことがごく当たり前だということです。日本では、演劇や音楽など有名人以外の公演に足を運ぶことは少ないと思うのですが、こちらでは週末に芸術に触れる機会が多くあります。金沢は比較的芸術文化に恵まれ、また理解のある土地だと思うのですが、それでも実際に演劇を観る人はごく一部でしょう。ですが、こちらでは、もっとより芸術が身近にあるのは間違いありません。例えば、大学のクオードと呼ばれる広場でドラムや楽器の演奏を練習している人も良く見かけますし、突然コンサートが始まったりもします。ちょっとした集会などでも演劇や歌、ダンスなどを披露するほどです。芸術が生活のなかに密着しているということは、文化として芸術が捉えられているということでしょう。日本では、まだ芸術は芸術であって、文化と呼べるまで身近なものではないかもしれません。

3. 教育の中に生きる演劇

こちらで教育の中に演劇が生きていることもすばらしいと思ったことの一つです。驚いたことに大学でTAの試験に合格した学生は、演劇の特別講義を受けなければならないそうです。人にモノを教えることに演技が役立つと考えているのでしょう。「演劇は説得の芸術だ」という言葉があるのですが、まさに大学側はそのような説得のノウハウが演劇にあると評価しているのです。そのような特別講義があるのだと思います。対人関係を重視するアメリカならではの教育システムです。日本人はよく、プレゼンテーションなどが苦手だと言われているのですから、日本人にこそ、このような演劇教育必要だと思うのですが。

4. 習熟した観劇マナー

他にも観劇時のエチケットやマナーについてもよく習熟しているなど感じます。例えば、暗転が行われた後の拍手は見事にお約束として入れられますし、休憩についてもアナウンスなどが入ることもなく、客席に明かりが入れば各々勝手に10分間の休憩時間を過ごします。

一方日本ではどの場面で拍手をするのかといったことや、休憩の取り方などに習熟している人というのはすごく少ないように思います。日本では休憩の度にいちいちアナウンスを入れますし、拍手もどこでして良いのかわからず、客席が混乱していることもよくあります。

このような観劇方法の習熟度の差は、一重に観客が劇場へ足を運ぶ回数が多いからだだと思います。観客の多くが何度も劇場へ通う間にお約束が作られたのでしょう。このような観劇スタイルに触れていると、いつも指示されなければ動けないという意味で、日本での観劇方法が子供のような印象を受けます。それに対してこちらの観劇は大人の印象です。指示されなくても行動できるからです。このような観劇方法の一つとっても、芸術が文化として定着していることがわかります。

5. すばらしい劇場

イリノイ大学はKrannert Centerという劇場を持っています。中にはコンサートホールが二つ、演劇とダンス用の劇場二つがあります。特筆すべきは日本と同じ地方の文化施設であっても、それらが劇場やコンサートホールであって、多目的ホールではないということです。よく、「多目的ホールは無目的ホールだ」などと言われるのですが、その意味がこちらの劇場に来てよくわかりました。演劇は演劇用であって、コンサート用の部屋では鑑賞できないのです。

一番の理由は音の響きの違いです。楽器にとって有利な空間と、声にとって有利な空間が違います。ミュージカルの場合は、どちらかと言えば楽器よりの空間なのですが、ミュージカルは通常マイクを使用しますので、これでよいのかも知れません。

次に客席数です。日本で、もしミュージカルを観るとなると本当に大きな2000席くらいの大劇場になってしまうところですが、こちらではブロードウェイでさえ、大きくても1200~1600程度だと思われます。どこにいても観やすいすばらしい環境です。これも、観客の視点に立った劇場サイズで、演劇に対して理解が深いことがわかります。日本のようにサイズだけ大きな劇場をたくさん建てることは文化に対する理解が低いと言わざるを得ないと思います。

6. 日米俳優比較

私は、こちらの俳優を直接見るまで、アメリカの俳優は素晴らしいものだと思い込んでいました。ですが実際に直に彼らを観て、そうでもないなということを感じました。確かに素晴らしいと思う点は多々あるのですが、日本人でもこちらで通用するような俳優は沢山いるだろうと感じました。

アメリカの俳優の演技はすごく自然です。日常を謙虚に表現しようとしていると感じます。一方日本の俳優の演技はやや大げさで芝居臭く感じます。この点は日本の俳優ももっと勉強してもらい

たいと感じる点ではあります。しかし、そもそも英語は演劇に適した言語であるというのが、この自然さに対する感じ方の違いではないかと思いました。英語は元々響きが日本語に比べて深く、ジェスチャーも大げさです。ですから、演劇になっても自然さがそこまで失われることはないのではないかと。一方で、日本人は元々、声も身振りも小さいので、これが舞台用に大げさにされると、不自然さが際立つ形になります。実際、授業で演技をする機会に英語での演技は楽だと感じました。それは、自然さが損なわれないからです。演劇が日本で大きな支持を集められないのは、ひょっとすれば日米の俳優の実力の違いというよりは、言語の壁のせいかもしれません。

7. やや幼稚なミュージカル

素晴らしい俳優とスタッフに支えられた舞台は大変見ごたえのあるものが多いのですが、こちらのミュージカルを私はあまり好きにはなれませんでした。それは、どうしても幼稚に感じるからです。ブロードウェイとイリノイ大学で10本近いミュージカルを見たのですが、どれも同じでパフォーマンスが多く、その手の演出効果を見飽きている私には今一つでした。確かに、楽しく面白いのですが、それだけという感じで幼稚な印象を受けました。なんといえればいいのか、子供向け番組の延長といった印象です。おそらくですが、ミュージカルという表現手段が幼稚になりやすいのかもしれません。とはいうものの、どれもパフォーマンスとしては完成されているので、面白くはあるのですが、私の趣味と合わなかっただけかもしれません。

ただ、ミュージカルの中でもブロードウェイで見た「オペラ座の怪人」は唯一大人が見ても面白いミュージカルだったと思います。「もし、ブロードウェイで大人のミュージカルを観たいのであれば、「オペラ座の怪人」はお勧めです。

8. まとめ

日米の演劇事情を比較すると、演劇に対する評価と理解がアメリカの方が深いというのは間違いないだろうと思います。これまでに紹介した劇場や教育制度をとっても明らかですが、他にも、日本には国立の演劇科が存在しないということからも明らかでしょう。日本には演劇が育つインフラがないと言わざるを得ないと思います。

私は日本の演劇はもっと評価されてもいいと思いますし、もっと身近にあってもおかしくない水準にあるのではないかなと感じています。いつか日本でも演劇が文化だと呼べる日が来ることを願い、また私自身演劇に関わるものとして努力していきたいと思います。

以上を今月の月例報告とさせていただきます。